

鬼の宝 — 靈感の心理学Ⅵ —

鈴木 研二

夢見長者

学校のない時分、十二人の子供ん衆が学問しおったところが、正月の二日に師匠が「初夢を見た者は話をするように」とのお達し。ところが、「わしあこういう夢を見ました」「わしあこういう夢を見ました」と、皆話をしたが、一人の子は「私は見ることは見ましたが、いわん」というて、どうしても話さん。「いわんという作法はない、いえ」「いいや、どがん（どんな）ことがあつてもいわん」「そんならもう、仕様はなか（ない）、ウチロー船（うつぼ船）に乗せて流そう、それでもいわんか」「いいやいい申はん」——四角の船で四方に金の棒をかけて、瀬に当たると反つて陸に寄らんごとした船に乗せて、飯米は蘇鉄の実を入れて、流したもんじゃ。

その子供の見た夢は、二人の女に手を打ちかけて橋を渡るといふ夢であつた。——はやかればはやかもんで（話は早いもので）、正月十六日、船は鬼が島の磯に着いた。浜だから、船はゴローツと着いた。鬼ど（鬼ども）がその船を見つけて、取ろうとしたところが、船の表には、これを助けた者は一家一門七いとこまでみな殺す、と書あり、艦には、これを助けた者は一家一門七いとこまで幸せに暮らせると書あてある。鬼どもはヤアヤアいうて船を引っ張ったとこ

ろが、船が二つに割れて、中から子供が出て来たので、これを囓もうという話になった。ところが一人の鬼が「そうはいかん。囓うでしまうと大将に怒られる」というので、まず大将にその話をしたところが、「そらよかつた。俎で肴切りにして持つて来い」とのことである。「待つてくれ、切られてこまめになつてからはいかん。今のうちに話したいことがある。大将に会わせてくれ」というと鬼どもは、子供を大将のところへ連れて行つた。そこで子供が「私ど（私ども）は三人で賭けをして、一人は竜宮、一人は地獄極楽、俺はここへ来て宝物を見て帰る約束をした。俺は死ぬ前に宝物を見て死にたい。見て死ねば、あの世で話ができる」というと、大将は棒を三本持つてきて見せて「一本は千里棒という物で、千里といえば千里飛ぶ。一本は生き棒という物で、死んだ人の身体をなでれば生き返る物、一本は聴耳、これは鳥けだものいうことがわかるもの」という。「手にども触らせてくれ、三人そろつたときに、お前は握つてもみなかつたかといわれるから」「握つてもよいが、物言わじん握れ」「子供は握るが早い、」「千里千里」というて、大阪の国まで飛んだ。

子供がある家の門先に来たところが、鳥が二羽止まつている。聴耳棒を耳に当ててみると、「西の長者のひとり娘が死のうとしてい

る。早う急げ、急げ」というている。子供が急いで、西の長者のところへ行こらったところが、川に十人くらいの女が出船（葬式の意か）の米をといでいる。「俺は法者（占い者）じゃが、死んだ娘を見たいもんだ」というと一人の女が、米をとぐのをやめて、子供を長者殿へ連れて行つた。長者殿は喜んで、早速娘を見てくれという。子供が「今死んだもんなら見てみたい」というて、死んだ娘のぐい（周囲）に屏風を立てて、生き棒でなでたところが、娘は生き返つておずみ出えた（起き出した）。

さあ、こういうことは今までになかことだというて、生き返つた娘に夕飯食べさせたりすると、元の人間になった。長者殿では「この人は命ん主だから」というて、子供を娘の聲にして結構な暮らしをしてもらった。

そうしておらつたところが、今度めは、東の長者のひとり娘が、コロッと死んだ。「西の長者の智殿は死んだ人間を生き返らせるちゆうが、たのんできて娘を生き返らさんにやらん」——たのみに来た。西の長者はできんというた。向こうへやれば、向こうもひとり娘だから、また養子に取られる。しかし東の長者が決して聲には望まんというたので、智殿は助けに行つた。そして生き棒で娘の命を助けたところが、東の長者はいつまでも息子を返さん。

西の長者は殿様に裁あてもらつた。裁あてもらつたところが、十五日は東、下十五日は西の聲になれとのこと。息子は二つの世帯をもらつて、十五日目、十五日目には途中の橋で二人の女に送り迎えされて、初夢のとおり二人の女の肩に手をかけることができたということである。

——鹿児島県薩摩郡上甕島——

二

再び夢で始まる昔話である。しかも「味噌買橋」と同じく橋も登場する。

夢が絡み、橋すなわちそれでつながれる二つの世界／意識状態が絡み、さらに二人の女まで関っている。二という数がこの昔話のあちこちに散見される。正月の二日から始まり、船は二つに割れ、鳥は二羽、二つの世帯……という具合である。

二という数は対立する両極、すなわち二面性を象徴する。子どもとおとな。夢と現実。反抗と従順。生と死。嘘と真実……。対立する両極が二である。

時の流れ、命の流れ、運命の流れ……等の流れは未知なる何かを運んでくる。それは変化である。その未知は必ず二面性を含んでいる。いいことだけでは済まない。といって、悪いことだけでもない。未知には嫌なこともあれば嬉しいことも伴う。明と暗、真と偽、光と闇。——それが二である。

この昔話は二面性を束ねたような話であり、主人公も二面性を象徴するような子どもである。それにしても——この話にはいくつか、どうにも腑に落ちない二が残る。

① うつぽ船で流されることになつても師匠には頑固に口を鎖した子供が、鬼の大將には実にすらすらと口上を述べている。

② 正月の二日には子どもだった主人公が、十六日の鬼が島の一件の後では、智殿になるくらいおとなである。

③ うつぽ船の表に書かれた「これを助けた者は一家一門七いとこまでみな殺す」と、鱸の「これを助けた者は一家一門七いとこまで

幸せに暮らせる」という対の文句。

これらは、向きのちがった木の枝を無理に一つの束に丸めたように、昔話の中に説明抜きで、バラバラと放りだされてある。これも二面性の表れであろう。おそらく、主人公の子どもの二面性とも深く関るのである。

夢を話すことと話さないこと

おとなの眼から見たら、この子はかわいくない子どもである。師匠の（言う）ことはあっさり無視する。生命にかかわる脅しにも平然と屈しない。―意志が固いというべきか、こだわりが強いというべきか。おとなを舐めているというべきか、融通がきかないというべきか。

しかし、師匠も師匠である。教え子をうつば船に乗せて流してしまふというのだから。前々から面白くないこともあったのか。脅しのつもりが、引っこみがつかなくなった拳句のことなのか…。

けれども主人公の子供は、こうして一寸法師と同じ途を辿ることになる。すなわち、共同体から追放され、流れ―運命の流れ―の中にたった一人で放りだされるという、英雄か死かの旅路である。もはや子どもではいられない。

この話、『日本昔話大成』では「夢見小僧」という話型に分類されている。主人公は大抵、小僧／子どもである。どの類話を見ても、主人公は夢を話さないことよって流されるか、追放される。追いだすのは親・師匠・傭い主・代官…だから、こういう子どもは家族・学校・職場集団・地域社会といった共同体の中においておけない、とい

うわけであろう。

たかが夢ではないかとも思うが、「味噌買橋」の福德長者のような話もあることからして、当時から夢に対して両極の見方があったのである。鳥取県東伯郡の類話においても、傭い主の徳兵衛は、「この家は夢見で大金持ちになった家だ、夢を話せ」と主人公に迫っている。

昔話の冒頭から、夢―沈黙の知と世間の作法という二つが正面衝突し、主人公にとって命がけの展開となる。さらに、行く先々でも主人公の子供には、生か死か、一か八かという、勝負師のような運命がつきまとう。すなわち、師匠との一件から始まって、鬼の大将とのやりとり、二人の娘の生と死、そして殿様の裁き。これらは、一つまちがえば全てを失いかねない、賭博のような局面の連続である。吉とでるか凶とでるか、中間はない。

子供には鬼の大将とのやりとりに見られるような、おとな顔負けの交渉能力があるのに、師匠と対峙する場面では、頑としてそれを使わない。自分の生命にも無頓着に見える。

私は、この子どもの中には、解離した複数の人格が存在しているのではないかと思う。社会性のない命知らずの人格と、おそろしく社交的で狡猾な、鬼をも欺くような人格と。そして、それら複数の人格が一まとまりに調和しているようには見えない。

しかし―。子供が夢を話さないことに関して、私にはその気持がわからないわけでもない。類話を読んでも、「よい夢は人にいうものではない」という言葉が教訓のように挿まれているものがいくつかある。夢を話さないことには、わけがあるのだ。

どんなわけか。なぜ夢を話さないのか。

夢は一般に、それを見た人のプライヴァシーが深く関る。よい夢でも悪い夢でも、眠って見る夢でも、将来に関する夢でも、そのことは

変らない。プライヴァシーとは人のこころの奥底の、柔らかな・傷つきやすい部分のことである。下手に口にすれば、それは盗まれるかもしれない。あるいは妬まれるかもしれない。さらに、人が悪い相手だったら、嘲られる・攻撃される、ということもある。

「味噌買橋に行けばいいことがある」も「休学して放浪する」も「二人の女に手を打ちかけて橋を渡る」も、その点は同じである。(三番目の夢にはさらに、重婚という、社会制度に抵触する問題も絡んでいる) 私は子どもの頃、「おとなになったら何になりたいの?」と訊かれた。とっさに心に浮ぶことは何もなかった。時にはとってつけたようなことも答えていた。が、実は夢はあった。(魔法使いか忍者)。あるにはあったが、誰にも言う気にならなかった。人の前では忘れてさえいた。

現在私は心理学者／心理療法家／もの書きをしている。やってみて、この職業はシャーマンの系譜に連なることを実感している。魔法使いにも相当近い。だから今、私は子どもの頃の夢をほぼ実現したのだが、ものごころがついて以来四十年近く、そのことを誰にも話したことはなかった。なぜならふだんは、夜の夢を忘れるよう忘れているということがあり、それに加えて、わかってもない他人に何だかんだと評価されたくない、ということもあった。

しかし、うつぼ船で流すと言われたら、私なら適当なことをいってごまかす。そうやって相手の顔も立て、自分の命の安全も図るだろう。

だが、この子供にはその配慮がない。真正直なのか、師匠の立場に配慮しないのか、あるいは命を脅かされることを何とも思わないのか。

心理学の世界では最近になって、こういう子ども／おとなが思った

より多くいることがわかってきた。臨床家の経験と照らし合えると、この子には自閉症スペクトラム(AS)の傾向が若干強いように思われる。その傾向が強い人は、まっ正直で、他人の心を感じにくくて、命(自分のも他人のもの)のことをあまり気にかけないところがある。(そうかと思うと、命をひどく気にかける時もある)

しかし、だからこそ、子供は彼なりのやり方で共同体を離れ、運命の流れのただ中に身を置き(け)たのである。

こうして彼も、これまでの昔話の主人公たちと同列のスタート台に立った。すなわち、小さな鯛を助けて、くらげの背に乗った「聴き耳」の主人公。貧乏で、生きていても仕方がないと狼に食われに行った、「狼の眉毛」の主人公。殿さまに呼ばれ、行ったら命はないと思いつつ、山道で寝ることになった「鼻かみ権次」。爺さんに弁当を届けようと、山にかかる道を行った「取つく引つく」の婆さん。沢上村を離れて味噌買橋まで来た長吉。そしてこの子供。

みんな共同体／OSCを離れ、流れ／変化に身を委ね、異界／ASCへと運ばれていったのである。

ウチロー船

古来日本には、変化(へんげ)のものや不用の客神を海上はるかな沖に流す習慣があったという。使われる舟がうつぼ舟である。もともとは大木をくり抜いた丸木舟のようだが、「四角の船で四方に金の棒をかけて」という記述からすると、ここでは金棒つきの棺桶のようでもある。

子供は変化のもののか不用の客神のような扱いを受けた、ということであろう。敬して遠ざけられたのだ。師匠は、子供に腹をたてただけではなく、畏れてもいたということであろう。世間の作法が通じない

ということは、何をしでかすかわからない怖さにも通じているのである。

子どもとは元来、多少なりともそういう二面性をもつ存在である。

この世に新しい未知をもつて生れてくる。その否定面が強烈だと、世間はその子をうつぼ舟で流したくなる。しかし、流されるとは流れに乗ることもある。流されて死ぬか、生き延びて英雄となるか、どちらかわからない運命の流れに……

ウチロー船の形が興味深い。四方に金の棒がついた棺桶のようだとは先ほど書いたばかりだが、それが象徴するのは次のようなことであろう。

金の棒——「瀬に当たると反って陸に寄らんごとした」とある。これを人間のありようで見れば、〈寄ってくるなオーラ〉であろうか。（陸——世間の方だつて彼を畏れているのだが）、ウチロー船からしても瀬や陸には接したくない——人や世間が怖いのである。怖いのには淋しい。淋しいくせに怖いから強がる。——これが〈寄ってくるなオーラ〉すなわち金の棒が象徴する心性であろう。怖いと淋しい、まさにこれも二である。

四角の船。四角四面という。きちんとしてっかりしているが、しゃちほこ張って融通がきかない一面がある。これもこの子供を表現するのにぴったりの象徴だろう。

さらにこの形は棺桶を連想させる。死のおいを漂わせているのだが、怖——淋しい人は、しばしば、消えたい、死にたいと言う。子供はもともと命を気にかけないようなところがあつたから、そうになると、船の中身は死と、おそらくそれに引き続く再生、であろうか。

この船が、「行けばいいことがある」という、彼の味噌買橋である。運命とは、流れと人の意志が噛み合うところに紡ぎだされる糸のよ

うなものらしい。流れと意志が調和すると、運命は順調に紡がれる。意志が流れと闘うと、糸はもつれ、混乱し、時に破綻する。

ウチロー船にはもう一つ不可解な箇所があつた。これは鬼が島で鬼たちに発見されるのだが、船には奇妙な文句が書かれている。船の表に書かれた「これを助けた者は一家一門七いとこまでみな殺す」と、艦に書かれた「これを助けた者は一家一門七いとこまで幸せに暮らせる」である。

二は船体にまで、二本の角のように突き出ている。「これを助けた者は呪われる」と「これを助けた者は幸せになる」という二面性。ギリシア神話のパンドラの箱と同じく、呪いが先（表）、希望が後（艦）になっている。

つまりこれは、流される子供にも流す師匠にも覚悟は必要だつたが、それと同じく、新たに船とその中身を受けとる者たちにも覚悟が必要だ、という警告であろう。二／未知は、それを担う子供自身も、それを受けとる陸や鬼が島にとつても扱いがたいへんで、慎重さを要するのである。

肯定的な側面に着目すれば、大きな未知を担う子どもほど天才／天の佑けであろう。けれども否定的な側面に着目すれば、それは同時に悪童／厄災ともなりうる。

鬼たちの失敗は、そもそもこの船を二つに割ってしまったことにある。二は一緒に保持し／甘受することが肝心で、一と一にバラすのはなはだ危険である。

子供の見た夢

「二人の女に手を打ちかけて橋を渡る」という夢のどこに、主人公が決してこれを口にしないほどの大層な意味が潜んでいるのであろうか。

橋が二つの世界／意識状態をつなぐ通路を象徴することは、再三述べた。昔話を終りまで辿ると、この二つとは、世間と鬼が島であり、一人の子どもの中の、社会性のない命知らずの人格と社交的で狡猾な人格であり、また、西の長者の娘と東の長者の娘、となっていく。「二人の女に手を打ちかけて」という副詞節がついているから、特に三番目の二が強調されているのだが、前の二つも決して見落すわけにはいかない。しかも、橋でつなぐ二つの世界／意識状態の二と、二人の女の二が、二を二倍に強調している。

この橋を往ったり来たりしながら、二人の女のバランスをとって、二を一つにつなぐのがこの子の一生の課題であろう。

つまり、橋を渡る夢を見た子供は、OSCとASCをつなぐシャーマンの課題とその才能をもつだけでなく、解離した人格を統合するというテーマと可能性をもつと考えられる。さらには、夢は子供が二人の女と結婚するという難題とその可能性も示していた、というわけであらう。

それにしても――。この娘たちだって、死んだり生き返ったりと、振れ幅の激しいことである。各々一回でおさまるなどとは、なかなか考えられない。主人公と嫁たちは、おそらく似かよった人生の課題を抱えているのだらう。

この風変わりな形態での暮しなら、彼も彼女たちも、一生人生に退屈しないことだらう。

二人の女が橋の兩岸に別れて住んでいることからすると、二つの世界／意識状態には別々のアニメがいているということだ。二つをつなぐの

は橋と、そして智殿自身である。単純化すれば、智殿の存在そのものが橋なのだと言ってもよい。

彼は二つの生命原理／魂をもち、その双方とうまくやっていく必要がある。――これがまさにシャーマンの宿命であり、かつ、子供の人生である。

たしかに、こういう話はうかつに他人にできない。夢の意味がわかっていなければともかく、うすうすともわかるところがあるのなら、おいそれと余人に話すことではない。さらに――私の（魔法使いになりたい）からしても、それが意味するところをおとなにわかるように伝えるのは、子どもにとって至難の業である。

だから、子供は夢を話すこともなく、ウチロー船で流されるに任せしかなかった、とも言える。それが運命の必然であつたというべきかもしれない。

鬼が島

子供が流れ着いたという鬼が島は一体どこにあるのか。

ウチロー船で二週間もかかっている。その間、周囲から隔絶され、蘇鉄の実で命をつなぎ、何とか生き延びていたのだから、意識がトランス状態になったとしても不思議はない。「夢見小僧」の類話には、主人公が流されてから以降のエピソードが全部夢だった、と最後に種あかしされているものがある。（鹿児島県鹿児島市、岩手県岩手郡）

これらのことからして、鬼が島あるいはそこでのできごとは、子供の変性意識状態または夢の体験と考えてよいだらう。

子供が鬼の大将にする話が興味深い。「私どは三人で賭けをして、一人は竜宮、一人は地獄極楽、俺はここへ来て宝物を見て帰る約束を

した」

ここでもまた、心理臨床家の経験を述べたくなる。もしかすると、この子の人格は二つどころか、三つ以上に分れているのかもしれない。子どもの話が真実なら、そのことは言わずもがなである。たとえ嘘だとしても、こういう嘘がすつとつける基盤には、往々にして、彼の日頃の、イメージに浸る習慣と人格の解離傾向が想定される。

さらに、こんなことも考えられる。「聴き耳」の主人公が行った先はねりや（竜宮）であった。「狼の眉毛」の主人公は狼のいる山（Ⅱ地獄のようなところ？）を訪れ、結末は四国遍路―それが目指すのは原点／中心（Ⅱ極楽？）への回帰、であろうか。とすると、子供の話は、それがたためであろうがなかるうが、日本人のここらにとつて典型的なASC（竜宮、地獄極楽、鬼が島）を言い当てているということになる。

そこに到達する手だては、これまで書いてきたようにいろいろある。中にはこの子供のように、ウチロー船で流されるという、命を落しかねない危険なやり方も存在するかわるわれる。

千里棒

鬼の大將が持っていた宝物というのは三本の棒であった。

鬼が島に着いた頃から、子供の周辺には三という数が見え隠れし始める。三人の賭け、それに伴う三箇所のASC（竜宮・地獄極楽・鬼が島）、そして三本の棒。三は変化、変動、ダイナミックな動きを象徴する数として、ユング心理学では知られている。この三の出現に應じるかのように、昔話の流れは子供が法者（シャーマン）に、さらに聲殿へと、ダイナミックな変貌を遂げていく。

聴き耳についてはすでに論じたので、ここでは千里棒、さらに後続の節で生き棒、について考察する。

まずは千里棒である。本研究シリーズに登場する名前のある宝物というのは、霊感がらみの道具で、それが自覚的に用いられる場合をいうようだ。（自覚抜きでなら、子供はすでに千里棒を使っている。ウチロー船で流されて鬼が島に漂着したということが、子供のもつて生れた千里棒の働きによる）

千里棒とは、イメージの世界／ASCを自由に動き回る能力を象徴するようだ。動き回るだけではない。イメージの世界に出入りする力も千里棒には含まれるようだ。したがって、この棒をもてば、九州からでも大阪からでも鬼が島に行ける。鬼が島から地獄極楽に飛び、そこから東京へ、という旅も可能らしい。

こうなると―われわれが現実と呼ぶこの世界／意識状態も、一種の特殊なイメージ界であると見なす方が、話が整合的になる。現実とは地上にあるイメージ界であり、それに対して現実以外のイメージ界は、水中や海底、空中や天上、地中や地底にあると知覚されるらしい。現実とそれ以外のイメージ界では、リアリティと呼ばれる現実らしさと、人間の集中力が持続する時間がちがうらしい。が、いずれにしても、現実／OSCもさまざまなイメージ界／ASCも、われわれの知覚や認知の塊としてあることには変りがない。

千里棒とは、その知覚や認知の焦点を自由に移動させる能力を言うのであろう。

この能力もまた、人間のここらに本来備わっているのであらう、と私は考える。イメージをコントロールしてものごとを知覚する力である。これも実は、自閉症スペクトラム（AS）の傾向と高い相関があるようだ。この子供は、AS傾向が強そうだから、おそらく、千里棒

の力も強くもって生れているのかと思われる。

というの——私の研究仲間には千里棒の力を強くもつ人が何人かいる。彼女や彼には容易に映像や音、そしてにおいのイメージが浮び、その中にはいついていけるようだ。私は口惜しいことに、まず大抵そうならない。夢なら見る。イメージ誘導法を使えば、多少はイメージの世界にはいることもできる。しかし、S・グロフのホロトロピック・セラピーや、B・L・ワイズの前世療法を何回か試してみたが、私ははかばかしい経験をすることがない。

だが、私には彼女や彼のような強い解離傾向もない。イメージにはいつていく能力と現実を解離する力の間には、正の相関があるのだと思われる。

したがって、AS傾向も強くなく、解離もしにくい私の場合、もって生れた千里棒の性能もそれほど高くない、と考えられる。

しかし、全く経験がないかというと、そういうわけでもない。一度だけなら私にも千里棒の経験がある。（この体験は別の機会に書いたことがあるので、詳細に関してはそちらを参照されたい）*

二十六歳だった。当時の私は定職もなく、東京で一人暮らしをしていた。

ある冬の夕方。外出から帰り、下宿の炬燵に脚を入れて腹這いになった。その途端に畳が割れ、眼下が真っ青な海になった。そして、畳の上に自分の身体を残したまま、私は海底探査に潜っていき、とうとう地球の中心まで達してしまった、という破天荒な経験をした。

身体を地上に置いてもう一人の自分になることが、いかに気持のよいものであるか、自由であるか、私はこの時味わった。しかし、もう一度と願っても、二度と再びそうなれたことはない。

あの経験は何だったのか。

白昼夢？明晰夢？体外離脱？ はたまた千里棒……？ いずれにしてもこの経験からして、私は、子供が鬼が島に行ったと言っても怪しまない。どうやるのかは自分でもわからないが、そういうことが起るというのは、体験的に知っている。

「千里といえば千里飛ぶ」——移動は意志の働きである。私は地球の中心で方向感覚を失い、上下も左右もわからなくなった。そこは無音の世界で、視覚も身体感覚も消え、すると、自己と他者のちがいもなくなり、ただ「私」という意識だけになった。私は無であり、かつ全であった。そこに「地上に還ろう」という意志が動いた時、両手両足があつて、水を掻く手応えが生れた。方向なんてお構いなし。ただ上がろうという意志だけで、頭の向いた方向が上だった。

そうやって地上に戻った。だから、還りは意志である。だが、往きはわからない。きっかけは流れだろう。気がつくともうなっていた。——というのが流れのなせる業なのだろう。私たちが気がつくところの世に生れていたように、気がつくとき海だった。やがて、そこに探索の意志が加わって、私の場合、海底への下降が始まった。

昔話の子供も、最初は私と同じだったかもしれない。しかし、鬼が島で千里棒を手に入れてからは、ことの次第がちがつてきたかと思われる。

体外離脱するコツというのは明晰夢にあるらしい。C・カスターナダは明晰夢の状態にはいることを夢見と呼び、中米の呪術師の重要な技法に挙げている。

しかし、私にはこの点に関して、これ以上の知識と経験が欠けている。

つまり千里棒とは、イメージや明晰夢や体外離脱に関するシャーマニスティックな技法であろう。脱魂型のシャーマンはこの技法を駆使す

る。これが自由自在に使いこなせれば、竜宮でも地獄極楽でも鬼が島でも、はたまた過去にでも未来にでも行けて、宝物や知識をもち帰れるようだ。

仏教の六神通のうち、神足通というのがこれに当るのだろう、と私は考える。

この棒は、したがって、イメージという靈感が深く関った宝物である。

生き棒

これまで見てきたように、靈感の種類とその使われ方は多岐にわたる。「聴き耳」では動植物の音声を通して沈黙の知に接近し、宗教的悟りや病気の治療に役立てていた。「狼の眉毛」では、人間の本性を視覚的に見通し、これもまた、宗教的方面に向けて向上する手がかりにしていた。鼻かぎは、失せ物を探しだしたり病気の原因を見つけたりと、卜占や治療の手段として使われていた。

こうしてみると、靈感を発達させた人間は、預言・治病・卜占という、古代以来のシャーマンの役割を果たす人になることがわかる。

そうすると――生き棒の治病的機能は、聴き耳を以てしても、あるいは鼻かぎでも、同じように果せるかと思われる。

子供は聴耳も手に入れていた。なぜさらに生き棒なのか、という疑問がわく。加えて、生き棒が棒であることも、私には気にかかる。

参考までに、ここで一つ類話を紹介しておきたい。柳田国男の『日本の昔話』に収録されている、東北地方に伝わる「夢見小僧」である。

夢を見た息子

一人ののら息子が、ある時夢を見ました。あんまりいい夢なので、誰が聞きたいといっても話してくれません。村の名主様なら話さだろうとその家に連れて行ったが話さない。大黒様の前なら、と連れて行ったが、ここでも話そうとしません。大黒様は怒って家来たちに息子を追い払わせました。追われたのら息子はどんどん逃げた、と恐ろしい声で聞くので、息子は正直に追われて来たわけを話しました。すると鬼婆も、ぜひその夢をきかせてくれといってきたきません。のら息子が断ると、そんなら空を飛べるうちわをやるから、その代り夢の話をしてくれというのです。のら息子は、本当に空が飛べるかどうか、ためしてみて、うまく飛べたら話そうというので、鬼婆はうちわを息子に渡しました。息子が手にとってそろそろと煽ぎますとすうーと体が宙に浮きましたので、煽ぎながら空へ上ってそのまま逃げてしまいました。やがて海の上に出ましたが、大海の上を飛んでいるうちに疲れて来ました。どこかで一休みしようとして下を見渡すと一つの小さい島があったのでそこに下りて休んでいると、その島がゆらゆらと動き出したではありませんか。びっくりした息子がよく見ると、動くも道理、島と見たのは大鯨の背中だったのです。その鯨も息子から今までの話をきいて、もしその夢を語ってきかせてくれるなら、ふしぎの針というのをあげよう。その一つはどんな恐ろしいものでも刺せば死ぬ針で、他の一本は死んだものが生きかえる針だ、といいます。のら息子はまた、ためした上でないと話せないといって死ぬ方の針で鯨をさし殺して、先のうちわを使って陸の方へ逃げて来てしまいました。

さて陸へ下りるとそこはある城下町でしたが、町の中がなんとなく沈んで、人々は悲しそうな顔をしています。のら息子がわけをき

くと、昨日殿様のお姫様がなくなったので、みんなが悲しんでいる最中だということがわかりました。のら息子は、自分はある術を知っていて死んだ者でも生き返らせることができるかと町の人々に話しました。するとその評判は町中に広がってさっそく殿様から迎えが来て、なくなったお姫様を生きかえらせてもらいたいとのことでした。のら息子が殿様の屋敷に着くとすぐお姫様が寝ている座敷へ招ぜられました。息子はまだ眠ったようなお姫様の寝床のまわりへ金屏風をたて廻し、自分もその中にはいつて、

金のハグハグ 金のハグハグ

と唱えながら鯨からとり上げて来た生き針をお姫様のからだへさしました。すると不思議にも死んだはずのお姫様の顔にみるみる血の色がのぼって、ぱつちりと目をあけて生きかえりました。殿様をはじめみなのようなこびはいうまでもありません。たちまち町全体が祝いにかきかえるような騒ぎになりました。

そこでのら息子はお姫様の命の親だというので、ぜひ簪かんざしになってくれるよう、殿様が頼みましたが、息子はそれを辞退しました。その代りにたいそうなお金をご褒美ほうびにもらって家に帰り、両親と平和に暮したそうです。

この話でもそうだが、実は「夢見小僧」の類話に聴耳というのはそれほど登場しない。それに「聴き耳」においても、聴き耳が棒などとは書かれていない。むしろ聴耳頭巾ききみみづかひだったり、電話の受話器のようなものではないか、などと想像されている。千里棒も、類話ではうちわや扇だったり、千里車せんりしやだったりする。杖、拍子木というのものもあるにはあるが、千里棒も棒である必然性はそれほど高くないと思われる。「夢見長者」において、この三つが棒とされているのは、生き棒の

棒に引っぱられてのことではないか、と私は想像する。

生き棒と千里棒は、「夢見小僧」の主人公が手に入れる鬼の宝の中では、二つとも主役級である。しかしその生き棒も、類話の多くにおいて、生き針と表現されている。棒でなくて針なのである。しかも、この生き針はしばしば死に針と対になっている。

つまり、「夢見小僧」の鬼の宝で重要なのは千里棒と生き棒であるとして、それらがあえて棒である必然性は高くない。

こうしたことを踏まえたうえで、「夢見長者」の生き棒が何を象徴しているのかを考えたい。

「夢を見た息子」において、のら息子は死に針で大鯨をあつさり殺してしまふ。「夢見長者」の子供は、ウチロー船にあつさり乗せられる。二人の娘たちも、あつさり死んであつさり生き返る。この昔話では、主人公も含めて、生きものの生死はそれほど重大なことを考えられていないふしがある。

心理療法の経験に照らし合せてみると、こういう―死ぬ／殺すにあつさり向いがちな―人は、またもや、自閉症スペクトラム（AS）の傾向と深い関わりをもつように思われる。衝動に抑制がききにくく、言動が極端に走りがちなのだ。

だがここにも、一面的に言い切ることのできない複雑さが顔を覗かせる。AS傾向というのは、一方で敏感さと鈍感さを併せもつ性格特性らしい。生命に対しても、敏感で傷つきやすい感性と、逆に鈍感で傷つけることに平気な感性の、両面が混在する。（われわれは小論で再三再四、二と出合うのである）

たとえばAS傾向の強いある人は、「死ぬ、バカ」と言われて人一倍傷つくのに、自分も同じ言葉をしばしば口にする。そればかりか、口にした時の相手の心の痛み到人一倍鈍感である。かと思うと、別の

ある人は、刃物で傷つける自分の手の痛みには鈍感で、うらはらに、他人の心の急所を突く時の勘の働きは人一倍鋭敏だったりする。―敏感さと鈍感さが、このように、一人の人間の中に混在するのである。さらに、両者はしばしば解離する。敏感さと鈍感さを併せもつ人は、解離しやすい人でもある。

この敏感さと鈍感さは両刃の剣、つまり、死に針と生き針になる、と考えられる。人の急所を探って、そこに容赦なく打ちこむ「死ね、バカ」は、まさに死に針として働く。「この人、愛がない」などという直観は、それだけで攻撃的である。しかし、それができる人なら、同じ急所に活力を吹きこむこともできるはずである。死に針は引っくり返せば生き針になる。

剣道でも殺人剣／活人剣という。人を殺す剣は、使いようで人を活かす剣にもなる。

また、同じ刃物でも、外科医が持てば人を生かす道具になり、まさに生き針であるが、それを使いこなすのに、再び一種の鈍さが必要になる。相手の痛みを敏感に感じているだけでは、メスは使えないようだ。外科医は家族の手術ができないと聞くが、家族相手には、傷つく痛みに鈍くなりきれないのだろう。

禅仏教では棒や喝を用いる。そのやり方もかなり荒っぽい。棒でぶつ叩く。やられる弟子もだが、やる師匠も相当鈍くならなければやれないだろう、と私は思う。禅語録を読むと、棒をしたたか喰らって悟りの境地に至った弟子のことがよく書かれているが、ただただ痛い体罰を喰らったという思いで、いやになった弟子も数多くいたにちがいない。―これも生き棒と死に棒の例であろうが、直観は時に怒りに似た攻撃性を伴い、その効果は二面性をもつのである。

つまり、生き針はもともと死に針と一対になっていて、しかも、そ

れらを上手に用いるのに、生への愛と敏感さ／鈍感さの総てが必要である。やる側にも、そしてさらに、やられる側にも。

針が棒でなく鞭である昔話もある。「生き鞭死に鞭」。この鞭もまた、鬼の持っていた宝である。

以上を総合すると、生き棒とは攻撃的な荒っぽい道具である。使い方を誤ると、いじめになったり、死に棒になりかねない強引さと危険性を秘めている。しかも、これを使いこなすには鋭敏な感性だけでなく、相手の痛みや傷つきに対するある種の鈍さが必要になるようだ。まさに外科医のメス、あるいは禅の師匠が使う棒のような、こちらの働きであろうか。

生き棒の実際の使われ方が、さらに怪しい気である。死んで横たわった娘の周りに屏風を立てまわし、生き棒でなでる、あるいは生き針をからだへさす。すると「お姫様の顔にみるみる血の色がのぼる」というのだから、精神分析学派でなくとも性的な解釈が浮んでくる。

生き棒には男性固有の棒も象徴されているのかもしれない。

すると―男性固有の方を生き棒として使いこなすにも、禅の師匠や外科医のようなこころの働きが必要とされる、ということになるうか。

類話を見ても、この場面で生き返るのは圧倒的に若い娘である。そして、「夢を見た息子」のような結末の例は少なく、大抵の夢見小僧は助けた娘と結婚する。西の長者もそれを予想していた。これらのことも、フロイト的な生き棒の解釈を許容・支持するように思われる。

生き棒とは、直観（感）的／攻撃的／性的な鋭さと鈍さという、靈感が複雑に絡み合った宝物であるらしい。

鬼の宝

鬼の宝はもともとが鬼の持物だけあって、使い方によっては、使用者が鬼のようになる危険性があるようだ。宝ではあるが、二面性の強い宝である。だから、ふだんは鬼と一緒に鬼が島に隔離されているのだらう、と考えられる。(してみると)。狼の眉毛にも使用者が狼になる危険性があるのだらう。つまり、相手の本性を見透かしたら、使用者は相手を舐めてかかる、呑む、食う……というふうな)

千里棒が世俗にもちこまれて独り歩きすると、あたかも夢がしよつちゅう日常的意識に侵入してくるかのようになるだらう。白昼夢・幻覚・幻聴の世界が夜昼なく展開してしまう。傍から見ると、宝の持ち主は頭のおかしな人に映る。イメージというのは、現実とのつながりを欠くと危険である。千里棒はイメージ界への出入り／移動の自由とうらはらに、解離しやすさも併せもつ宝なのだ。

だから、多くの人は逆に千里棒を切り離して、鬼が島へと隔離する。生き棒／死に棒が世俗で独り歩きすると、メスや注射器は人殺しの道具にもなりかねない。棒の所持者は粗暴犯／虐待者／DV／体罰教師……と呼ばれ、男性性器は痴漢のシンボルと見なされてしまう。少なくとも、愛は不可欠である。

さらに――。死に棒はもちろんのこと、生き棒でも使い方には抑制と修練が必要で、それが充分でない場合、よけいなお節介りになりかねない。やはり鬼が島に隔離しておく方が無難である、と判断する人は多数でてこよう。

そういうわけだろうか、「夢を見た息子」には鬼が島が登場しないが、その代り、うちは鬼婆が、ふしぎの針は、大海に浮ぶ離れ小島と見まがうような大鯨が、それぞれもっていたのであろう。

一般に靈感が、使い方を誤ると危険な道具になりかねないことは、再三にわたって述べた。中でも危ないのはこの鬼の宝と、狼の眉毛であるうか。人の本性を見抜く眼にも、周囲からすると、ナイフで一突きにされるか狼にがぶりとやられそうな怖さを感じる。まさにこれらは鬼や狼の持物なのである。

それでは、「夢見長者」において、聴耳も鬼の宝とされているのはなぜなのか。(「聴き耳」では、聴き耳は竜宮の宝であった)

私は次のように考える。聴き耳とは、鳥や獣や植物の音声から、直観やイメージを働かせる道具であった。直観やイメージが能動的に関る道具は、聴き耳にしても鼻かぎにしても、千里棒や生き棒に次いで、一般には怖い鬼のような危険性を伴うと、感じられるのであろう。

それに対して、夢を見ること・身体のコサインや世界のサインを受けとめることは、より穏やか・受動的・人間的に見えるのであろう。

古来、中国や日本の呪術は鬼道と称されていた。卑弥呼にしても役の行者にしても、おそらくは、千里棒や生き棒を駆使する夢見小僧の眷属だったのだらう、と私は想像する。

運命、流れ、そして意志

「夢を見た息子」では、のら息子の見た夢に関して何も語られていない。しかし想像がつかないわけではない。夢の内容が語られている他の類話から推測すると、昔話の冒頭でのら息子が見た夢というのも、話の流れ全体、あるいはその一部を見たものだらう、と思われる。

夢分析家としての経験からすると、夢は、その人の人生を運んできた流れ、そしてその流れからして、ものごとはかくしかじかの方

るのである。

この流れに影響を及ぼせるのは、人間の意志と行為である。しかし、どんな行為が流れを促進し、どんな行為が流れに抵触するのかわ、行為の意図と結びつけてあらかじめ予測するのは困難である。子供が夢を話さないことが、あるいは師匠が子供をウチロー船で流すと脅すことが、この昔話の結末のようなことに結びつくことは、誰が予測しえただろうか。むしろ流れの結末から、個々の行為の果たした役割を分析する方が、ずっとわかりやすい。

夢見小僧の場合、夢を話さなかったことは、次の三つの効果をもったと思われる。

- ①自分の夢に対する関心・集中力が高まった。
- ②周囲の人々の不興を買った。
- ③周囲の人や鬼や妖怪、鯨まで、その夢に引きつけた。

流れと行為の関係は、こうして予測が難しく、結果論がわかりやすい。

これに対して、意志は直截的である。流れに、乗るか、降りるか、あるいは逆らうか。子供のもって生れた強い意志（AS傾向が関係する場合、こたわりとも呼ばれる）は夢とその流れに集中し、流れを促進したのである。

鬼が島では、彼は三本の棒に意志を向け、それらを手に入れ、法者になった。さらに、大阪で二人の女と結婚した。彼が夢に見たのはそういう流れであった。そして、殿様の意志もその流れを支持したのである。

流れに意志を沿わせれば、ものごとは成就する。

しかし、「夢を見た息子」の方は、結婚の話には乗らなかった。何らかの事情があるのだろうか、彼の意志はこの流れからは降りたのである。（大黒様—名主の奥さん？—からも、鬼婆からも逃げ、はては大鯨などは殺しているから、のら息子は女性的・母性的な存在が苦手か嫌いなものかもしれない）

すると、運命はちがったものになる。

こうしてみると、人の一生は、彼や彼女を運ぶ深遠な流れとその人の意志によって紡ぎだされる、長大な織物にも譬えられようか。不可視の流れもさることながら、人の意志というのも大した働きをするものである。

流れは未知なる二を運んでくる。流れに乗るということは、二のもたらす葛藤に耐えながら、自らの意志で二を保持するということである。（二人の娘との結婚）。すると二は、その人のこのころと人生に深みを与える。その際、二を一と一に切り離してはならない。（鬼が島で鬼たちがウチロー船にしたこと）。切り離された一と一は死に棒として働く。（解離とイメージ能力、直観と攻撃性）。愛でまとまった二が生き棒である。二を保持すること、それが流れに乗るということである。

けれども、流れに乗っても乗らなくても、人の命はそれなりに運ばれていくらしい。降りられるなら、降りてもよい。降りつばなしは疲れる。だが、降りてばかりでは人生が始まらない。しかも、流れに逆らったら、運命は混乱し、勢いを失い、時に破綻する。

人間にできることは、流れを感じし、自らの意志で、それに乗るかそれとも降りるかを決める、という辺りにあるように思われる。

〈註〉

- *1 関敬吾『日本昔話大成 3』角川書店 一九七八、から引用。
- *2 鈴木研二「夢と共時性」(『茨城キリスト教大学カウンセリング研究所紀要』28号 二〇一二、所収)
- *3 関敬吾『日本昔話大成 3』角川書店 一九七八
- *4 鈴木研二「ところを聴く耳」(『茨城キリスト教大学カウンセリング研究所紀要』26号 二〇一〇、所収)
- *5 鈴木研二『悟りの冒険』創元社 一九九〇
- *6 水柿義之「変性意識体験の関与観察的研究」(『おおみか教育研究』第8巻 二〇〇四、所収)
- *7 柳田国男『日本の昔話』角川書店 一九五三、より引用。

〈参考文献〉

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『古語大辞典』角川書店 一九八二

〈謝辞〉

茨城キリスト教大学の同僚の猿田知之教授には、日本語の方言についてご教示いただいた。記して感謝の意を表したい。

Treasures of an Ogre: Psychology of ESP (Part VI)

Kenji Suzuki

ABSTRACT

Analyzing a Japanese folktale “YUMEMICHŌJA (A Dreaming Rich Man)”, I speculated two-sidedness of human mind, namely, abilities of imaging and an inclination to dissociate, and intuition and aggression. In the folktale, the former is symbolized by “Senribō”, and the latter by “Ikibō”.

People take these complicated types of ESP as “treasures of an ogre”, because they are dangerous and at the same time useful.

Sorcery in Japan and China in ancient times was called KIDŌ. KI means an ogre. Himiko and Enno Ozunu, I suppose, might have used these kinds of ESP.

Keywords: two-sidedness, autistic spectrum, imagery, intuition